2.5 カナダ（アサバスカ公開大学）との共同研究
カナダにおける遠隔高等教育実情調査研究のフォローアップ事例研究*

カナダのバーチャル大学－TechBCに関する事例調査研究

小林登志生、山地弘起、川淵明美、高橋秀明、永岡慶三
メディア教育開発センター

＜あらまし＞
1999年9月に北米におけるバーチャル・ユニバーシティーのモデルを目指して設立されたブリティッシュ・コロンビア州のTechnical University of British Columbia（TechBC）が、その完成年度をまたず昨年3月に閉鎖された。本発表は、その経緯と様々な原因・ファクターについて行った現地訪問インタビュー調査の分析結果に関する中間報告である。
＜キーワード＞ICT、バーチャルユニバーシティ、教育経営、カナダの高等教育、遠隔学習
＊第19回日本教育工学会全国大会口頭発表論文（2003年）。

はじめに

本調査研究はメディア教育開発センターとカナダのアサバスカ大学との間で行った共同研究（平成11～13年度）のフォローアップとして実施した事例研究である。ブリティッシュ・コロンビア工科大学（(Technical University of British Columbia、以下、TechBCと略す)）は、カナダとの共同研究期間中毎年のように訪問し、その進行状況などもフォローした大学である。最後にTechBCを訪問したのは昨年の2月だが、その後帰国してから閉鎖されその経営をサイモンフレーザー大学に委譲することが決まっていることを知った。北米におけるバーチャル・ユニバーシティーのモデルを目指して設立された同大学の閉鎖は寝耳に水で、その要因・原因を調べる目的で本事例調査訪問研究を行った。本件事例調査実施にあたっては、BC州の高等教育庁担当官、TechBC運営関係者、主要大学遠隔教育関係者、地元住民にインタビューを行い、また元学生の反応に関わる調査についてはバンクーバー在住の学生、ジョン・トルーマン氏の多大な協力を得た。

* カナダの遠隔高等教育実情調査および本事例研究の詳細については別途研究報告書（メディア教育開発センター研究報告No.46、平成16年1月刊行）を参照されたい。

TechBC設立の背景

もともとは、Simon Frasaer大学を中心とする研究者や市民の小グループが、専門的な職業での成功に直接結びつくような大学を要請したことに始まり、1997年に州政府議会で議決された法律（The Technical University of British Columbia Act）に基づいて設立された大学である。カナダは、特に西海岸はコンスタントに移民が流入してくることによって、日本などと違い大学が足りず、高等教育を目指す人のためにもっと大学を作らねばならなかったという現状があった。そのためバンクーバー地域における従来の伝統型主要3大学（UBC,SFU,UVic）に加えて新しい遠隔手法での学部と大学院の授業を提供する大学を設置することとなった。TechBCはそういった地元のニーズがあって、公の大学として発足した大学である。最初の学生が入学したのが1999年、キャンパスの建設が開始したのが2000年、2001年からは博士と修士とのコースも開始した。

TechBC閉鎖の主要因

1．政治的な要因

突如州政府が交代してリベラル派に変わったために急に閉鎖が決定したということで、TechBCからすると受け入れがたい政治的な要因であった。またBC州の政治要因とは別にローカルな自治体の再開発という政治的な要因もあった。

2．経済的要因

背景にTechバブルの崩壊がある。Techバブルのピークは2000年の3月くらいで、その後はバブルがはじけて下降線の一途をたどった。Techという言葉に魅力がなくなりつつあったときに設置されてしまったというタイミングの悪さもあった。

3．イメージの問題

設置されたサレイは、バンクーバーという都市圏の中でももっとも低所得者層や新しいインド系の移民などが主に住んでいる地域でイメージが悪かったと考えられる。

4．経営的な要因

以上で述べたような予測ができなかったこと、十分に自分たちのモデルを市場化できなかったこと、当初の計画をそのまま推進できなかったこと、特に長期的にほかのサイモンフレーザーやビクトリア大学、UBC、その他もろもろの小規模の大学との連携を、TechBCは独自のモデルにこだわって、当初は積極的にしなかったことも問題であった。

5．競合の問題

TechBCにとって運が悪かったのは、TechBCの一年半ほど早くできたRoyal Roadsという大学が今でも存続していて上昇傾向にあり、独特なプログラムで成功しているということである。それと比べられたということが、新しいリベラルな政権になったときに、不運なことであった。

6．人的な要因

微妙な問題であり、インタビューではあまり言いたがらなかったけれど人間にかかわる要素もいろいろと考えられる。運営的にはTechBCの教務にかかわる副学長と研究担当の副学長のコミュニケーションがうまくなかった。

学生に対するWeb上の調査結果

他に、地元学生（John Truman）がTechBCの元学生たちに対してWeb上で意見を求めたサーベイを行いその集計結果を分析している。それによると、学生たちは、TechBCに関しては強い意識、つまりTechBCが非常にいい大学だった、という思いが表れている。いろいろ問題があって、SFUへの移行によって学生たちは満足していない。むしろTechBC時代の方が良かったと回答した学生が多い。それでもSFUサレイキャンパスで卒業するのは、SFUという名前が大きな要因であろうと思われる。

おわりに

インタビューをした大学の設置当初から関わった学長は、「TechBCは、カナダは言うに及ばず北米全域でも間違いなくヴァーチャルユニバーシティとしてモデルになれる大学だったのだ」、と強調する。そういった理想を持ってスタートした大学だったのに、ポリティカルな理由で閉鎖されることになったのであって、これからいろいろとやろうとしたことがあまりにもポリティカルな理由によって流産してしまったのは非常に残念で慙愧の念があると述べていた。

TechBCおよび州政府双方の側のインタビュー結果では、閉鎖にいたった要因は政治的な理由や大学経営上の問題が大きいように思われる。しかし本件調査を通して、ヴァーチャルユニバーシティという教育形態そのものが、カナダだけでなく、今後この形態を高等教育に推進しようとするどの国においてもそのビジネスモデル、学習モデル策定に関し多くの考慮すべき問題を内包していることが覗える。

TechBCのような公立大学の場合、遠隔教育機関とは言え、やはりほとんどの学生は地元出身である。他の州立大学の訪問調査結果を見ても学生は、ほとんどが自分の州プラス近隣の州からの学生で70～80％くらいを占めているケースが多い。インターナショナルと言っても、カナダ一のアサバスカでさえ10％以下に過ぎない。バーチャルを目指しても、地元でクライアントを集められないと運営がなりたたないというジレンマが常にある。TechBCの事例においても、政治的要因に加えてこの根幹的な問題が明らかにあったと言えよう。

この中間報告を踏まえ、遠隔学習形態に関する根幹的な問題についてはさらに研究・分析を進める必要がある。

参　考

・科学研究費補助金基盤(B)(2)研究成果報告書「日加間の遠隔学習における相互運用性に関する研究」研究代表者：小林登志生、2002.3
・http://www.techbcproject.com/
・http://www.aucc.ca/can_uni/our_universities/index_e.html